

展望 今、戦争を詠むこと

三沢左右

川野里子歌集『ウォーターリリー』を読んだ。作者は一冊を通して一編の詩を編んだのだと感じた。様々な題材が詠まれる歌集だが、統一感は損なわれない。連作の構成、歌集全体の構成が見事な一冊だ。

ウォーターリリーころに浮かべウォーターリリー光にふれてわたしは揺れる
なまぐさく群生の水仙せまりくる背後は
海に落ちる岬に

一首目、ベトナムを訪れかつての戦争に思いを馳せる連作中の一首だが、「ウォーターリリー」を反復する趣向の作品は歌集中に繰り返される。異なる題材の連作が同じフレーズを共有することで、一冊の声調が整う。

二首目は歌集終盤に登場する。生死の境界線上に咲く印象の花を「海に落ちる岬」に配置することで戦争の悲劇を想起させる。

ところで、現代日本において戦争を詠むとはどういうことなのだろうか。ほとんどの現代歌人は戦争を自身の体験として持たない。たとえば宮柊二の『山西省』は今もって歌人の範たるべき歌集だと私は考えるが、現代の

私たちが時代背景の異なる戦争詠の傑作を内容や形式だけを模倣したとしても、その「新作」を現代に問う意義は薄いだろう。

一方、新聞やテレビ報道の受け売り、見出しのような短歌も意義は小さい。リアルタイムの戦争の映像を高精度で目にする事ができる時代、圧倒的な現実言葉はどう向き合うべきか。

ここで私は、近現代の短歌にとらわれず、過去の詩に学んでみたい。

英国の小説家で詩人でもあったトマス・ハーデイは、第一次世界大戦下の空気を詩に残した。町に漂う不安を詩に昇華した一節を引用する。具象性と象徴性が、詩的でありながら生々しく往時の空気を伝える。

闇の中をけたたましく／頭の馬が疾走する
／石畳のわだちの上を／〈死神〉がのし歩き／すべてを震えあがらすように――

「戦時中の大晦日」（古川隆夫訳）

スペインの詩人ガルシア・ロルカは、スペイン内戦初期に処刑された。情熱とロマンの詩人であるロルカに戦争を直接に詠う詩は多

くないが、警察兵の横暴を詠った以下の引用作は内戦下の共和政府の兵士に愛唱されたという。ロルカの詩の持つ力は、戦時の現実を生きる人々に届いたのだ。

馬は黒。／蹄鉄も黒。／マントの上に／インクと蠟のしみが光る。／頭蓋骨は鉛で出来、／それ故 彼らは涙を知らぬ。

「スペイン警察兵のロマンセ」（小海水二訳）
漢詩に「辺塞詩」と呼ばれる作品群がある。中国辺境の任に着く兵士や、残された家族の心情を詠う詩であり、日本の「防人歌」にも通じる。現代では受け入れにくい価値観ではあるが、力強さと優美さ、憂いを湛えた言葉は今なお魅力的だ。一節を引用する。

酔臥沙場君莫笑／古來征戰幾人回

王翰^{わうかん}「涼州詞」

「酔つて砂漠に伏せる私を笑わないでくれ、遠征から生還できた兵などどれほどでもないのだから」と王翰は感傷を詠う。短い詩形に詩人は人間精神を美しく織り込んでゆく。

「詩歌でしか表現できないものがある」と詩歌の特権化してリアルタイムの現実から離れていくことは、翻って詩歌の力を弱めるだろう。だが、現代に詩が力を持ちうるはずれば、その道筋は、現実に対峙しつづつ詩歌の伝統を再検討する中で現れてくるように思う。